

〔著作堂一夕話〕富士の農男并淺間の辨

享和壬戌夏五月、囊を擔、杖を曳、ゆきく駿河の府中にあそぶ。彼地の人の説に、四五月の頃、富山の雪や、消残りたるが寶永山の邊凹なる所に、人の形の如く雪の殘る事有、是を農男と名付。此殘雪の見ゆる年もあり、又見へざる年も有、田子の土人曰農男見ゆる年は、必ず五穀熟すと、又昆陽漫錄に載する處の、富士の根がた、水田中に麥熟と是を水入麥といふ、是雪水齒ヨヤシと成て麥みのるといふ。駿河の人々に此事をとへば、然る事ありといへり。凡此山の眺望は、駿州有渡郡大野村府中より三里龍華寺の本堂より見るを第一とす。清見寺これに亞、原よし原の間又好景、三島沼津より見れば大にひきく、岩淵薩陀峠よりみれば、胸につかへる様にて凄じ。藐姑峯は齋の川原より、壹の平らまで、ふじを右に見る、一の平最よし西行法師の、山の上なる山は、ふじの根とよみたりしは、此所なるべし。予庚申年豆相二州を遊歴せし日、三島の客店に士峯を賞す、暫時百景目前に有、あした毎に雲起て嶺を覆ふ、土俗是を笠雲といふ。其雲西へ行時は、三日を出ずして雨あり、東へ行時は快時すと、これを試るに果してたがはず。略中天正十八年、小田原陣の時、細川幽齋ふじの歌よまんとて、歌書おほく携給ひしが、古人の名歌に耻て、終に歌なかりしとかや、近時俳諧師芭蕉、生涯富士の發句なく、丸山應擧富士を畫すといふ、ばせをは佳句の得がたきを嘆じ、應擧は富士を見ざるをはづ、視て句のなきと、見ずして畫せざると、うらみそれいづれか深き、共に道に心を用る人といふべし。

〔春波樓筆記〕吾國にて奇妙なるは富士山なり、此は冷際の中、少しく入りて、四時雪峯に絶えずして、夏は雪頂きにのみ消え残りて、眺め薄し。初冬始めて雪の降りたる景、誠に奇觀とす。富士は駿河の國內より見たるはあしく、二十里三十里隔たりて、遠くより望む時は、山を高く見る、低き地より望みては景色なし。此山のかたちは、世界中になし、元市場と云ふ處は、白酒を賣る處なり、爰